



Title	山越邦彦の「構築」概念について：1920－30年代日本における構成主義思想受容の一側面
Author(s)	梅宮，弘光
Citation	デザイン理論. 2008, 52, p. 122-123
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/53446
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

山越邦彦の「構築」概念について

— 1920-30年代日本における構成主義思想受容の一側面 —

梅宮弘光／神戸大学大学院

はじめに

本発表は、建築家山越邦彦(1900-80年)が1920-30年代に主唱した「構築」概念の展開を検証する。この主題に対する研究関心の基本的な枠組みは、山越の事跡解明を通してこの時代の日本におけるモダニズム建築思想の実相を検証することである。1930年12月の新興建築家連盟解散後、その中枢にいた建築家たちが相次いで新しい概念を提唱した。川喜田煉七郎は「抽象構成・生産構成」、市浦健は「建築構造学」、山越は「構築」。いずれにも含まれる「構」の一文字に構成主義との関わりが窺われる。これらを明らかにするためには、その生成過程としての彼らの1920年代を検証する必要がある。本発表ではその作業を山越邦彦の事跡に即して試みる。

1. 山越邦彦の略歴

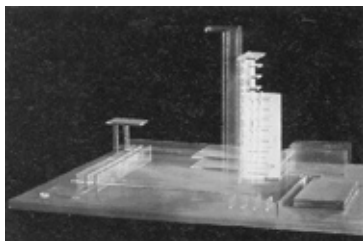
山越は1900年6月22日に東京に生まれ、1925年に東京帝国大学工学部建築学科を卒業、戸田組(現戸田建設)設計部に入社、1936年に退社して自宅に設計事務所を開設する。戦時体制下では陸軍召集を経て1940年の召集解除後に北京大学教授。戦後は法政大学教授を経て、1967年まで横浜国立大学教授の職にあった。1980年逝去。

山越が一般的な建築家と比して独自の点を時系列にあげると次のとおりである。1) 大正期新興美術運動との関わり、2) ジャーナリズムにおける旺盛な発言、3) 先進的な工法や環境技術の大胆な導入、4) 国際十進法分類によるドキュメンテーション、5) 中性洗剤による環境汚染の告発。一見したところ、

これらには脈絡を見出しにくい。とりわけ戦後の(4)(5)については建築領域外の活動にみえる。しかし、結論的に述べるならば、これらは「構築」概念で一貫している。

2. 大正期新興美術運動と山越

大正期新興美術運動の核となったグループのひとつに1924年結成の「三科」がある。玉村方久斗、柳瀬正夢、中原実ら美術家のほか、橋本健吉(北園克衛)、野川孟・隆兄弟ら詩人も参加した。玉村、橋本、野川(隆)は並行して『ゲエ・ギムギガム・プルルル・ギムゲム』(以下『G.G.P.G.』)を刊行した。三科はダダから生産主義的構成主義の傾斜を強めたとされる。この動向に山越は少なからず関わっている。1925年に玉村の自邸設計に関与した。1926年1月発行の『G.G.P.G.』に「構築 構築(Sutrukturismo)」を寄稿した。1927年の三科形成芸術展には「硝子構成物体」を出品した。その造形は、デ・ステイルやロシア構成主義に通ずる。山越はデ・ステイル誌を定期購読していた。同時期のスケッチはリートフェルトの家具に似ている。山越はこのとき、国際構成主義の広がりの中にいた。



硝子構成物体 1927年

3. 山越の分離派建築会批判

山越における構成主義の影響は、しかし、様式の上にとどまらない。「構築 構築 (Sutrukturismo)」では、制作の本質は「無形的発明」にあるとし脱様式を指向する。工業と科学を称揚し生産主義的傾向を強めていく。この時期の彼の思想は、朝日新聞の投書欄「鉄箒」上での分離派建築会批判によくあらわれている。当時竣工したばかりの東京中央電信局をめぐる、設計者である分離派建築会同人の山田守と瀧沢真弓を相手に交わされた論争である。対立の焦点は制作論である。分離派建築会は、作者個人の精神的・主体的なものを外面的形象として表すことを第一義とする表出説。山越は、主題と素材が決まれば、それらが要請するところに従い経済的合理性に則って、制作物はおのずと決定されるとする形成説。山越はこの立場から、東京中央電信局を時代遅れの装飾過多と断じた。

ここに、分離派建築会の結成（1920年）から新興建築家連盟の結成即解散（1930年）に至る1920年代を通じたモダニズム建築思想の転回を認めることができる。

4. 生産主義的構成主義の受容

こうした山越の思想形成の背景には、日本における生産主義的構成主義の受容がある。とりわけ、1922年に来日したロシア人画家ワルワラ・ブブノワによる構成主義紹介が重要であろう。ブブノワは構成主義をこう規定した。「〈物質を以て空間を構成するといふこと〉によって、絵画芸術から進化して来た、一つの新しい造形的行為は〈建設（主義）〉（ロシア語では単に〈工業〉“Industrija”に対して、“Konstrukcija”と云ふ、然し“Konstruktivismus”の意なり）といふものがあります。…斯くして、我々の理想の中に於ては、〈建設〉といふこと、〈工業〉といふ

こと、は、結局同一たる可き性質のものなのであります」（「現代に於けるロシア絵画の帰趨について」『思想』第13号、1922年10月）。1925年の日本で、山越もまたこう書いた。「造形について、材料の加工——機械によること／同上 材料の構築——凡て機械によること」（「構築 構築 (Sutrukturismo)」）。

5. 構築の実践：自邸「ドーム・ディナミーカ」

1933年、山越は自ら設計した自邸にさまざまな構築を盛り込んだ。建築家による実施としては日本初であろう温水式床暖房、微生物の働きを最大限に利用する独自の浄化槽、硝子窓を大胆に広げて太陽熱を採り入れるパッシヴ・ソーラーの手法、そして、外壁に石綿板、内壁にテックスという工業製品を用いる乾式構造（トロッケン・バウ）。こうした技術をめぐる当時の環境はいまだ未成熟であったが、家という「機物」（ブブノワの概念）を、工業製品を材料として、その特性が導く客観的妥当性に従って完成させる試みが、この自邸であった。



ドーム・ディナミーカ 1933年